

漁況・海況予報事業 (抄録)

松原 久・小田切譲二・青山 宝蔵・尾坂 康
鈴木 史紀・川村 俊一・伊藤 欣吾

I. 漁 況

スルメイカ・ヤリイカ・ウスメバルの好漁、マイワシ・マサバの減少が平成6年度の特徴的な漁況となった。

沿岸域におけるスルメイカ漁は太平洋で早い時期(6月)から本格的に漁獲が始まり、最盛期には全海域で多く漁獲されたが、後半は低調であった。しかしながら、平成6年度のスルメイカ漁は、過去5年間で最も漁獲の多かった前年度をさらに上回る漁獲量となった。

日本海の定置網・底建網で漁獲されるマダイは3年連続の減少となった。

主として定置網で漁獲される日本海のブリは前年度まで5年連続の増加傾向であったが、平成6年度は前年度に比べて約20%の減少となった。

太平洋のまき網で漁獲されるマサバは前年13万トンを超える好漁であったが、平成6年度は5万トンを下回り、前年度の好漁が一時的なものであったことを印象づけた。一方、日本海のマサバは、低い水準ながら増加傾向であった。

資源減少が危惧されている太平洋の巻き網によるマイワシ漁は、依然として減少傾向が続いた。

II. 海 況

平成6年度の青森県沿岸の海況は、日本海沿岸定線観測・太平洋沖合定線観測結果から求めた対馬暖流(日本海)・津軽暖流(太平洋)の流勢指標を平年と比較する事により示す。

日本海及び太平洋の定線図を図1に、流勢指標の暖流幅、津軽暖流張り出し位置、水塊深度については、その模式図を図2および図3に示した。また、平年比較の度合いについては、章末「参考」に示した。

1. 日本海(観測月3~7月、9~11月、各月1回)

・最高水温(0・50・100m層)

青森県沿岸における対馬暖流の各月最高水温は、4月~5月は全層で”平年並”、それ以降は概ね”やや高め”~”はなはだ高め”に推移し、”平年並”あるいは”やや低め”は一時期のみであった。

・暖流幅(艦作線・十三線) ; 100m層水温5℃の離岸距離

艦作線の暖流幅は、4月・6月は”やや狭い”~”平年並”に推移し、その他の時期は概ね”かなり幅広い”~”はなはだ幅広い”で推移した。十三線の暖流幅は、4月~7月は”やや狭い”~”平

年並”に、9月～11月は”はなはだ幅広く”に推移したが、3月には”やや幅広い”となった。

- ・水塊深度；艦作線での水温7℃の最深度

艦作線での水塊深度は、9月・10月が”やや深め”～”かなり深め”であったものの、他の時期は、”平年並”であった。

- ・艦作崎西方における対馬暖流北上流量

艦作崎西方における対馬暖流北上流量は、6月が”やや多い”、10月が”はなはだ多い”、11月が”やや多い”であった他は、”平年並”に推移した。

2. 太平洋（観測月 3月、6月、9月、11月）

- ・最高水温（0・50・100m層）

定線内での各層の各月最高水温は、11月に全層で”かなり高め”～”はなはだ高め”となった他は概ね”平年並”であった。

- ・津軽暖流張り出し位置（尻屋崎線）；津軽暖流系水*の尻屋崎線100m深での東端位置

尻屋崎線における津軽暖流の張り出し位置は、対象期間を通して”平年並”だった。

- ・水塊深度；尻屋崎線での水温7℃の最深度

尻屋崎線での水塊深度は、6月が”かなり浅め”、9月が”やや深め”、11月が”平年並”、3月が”かなり深め”となった。

※津軽暖流系水：花輪・三寺の水塊分類法（図4）による津軽暖流水で塩分33.7～34.2psu、水温5℃以上、密度（ σ_t ）24.0以下で規定される。

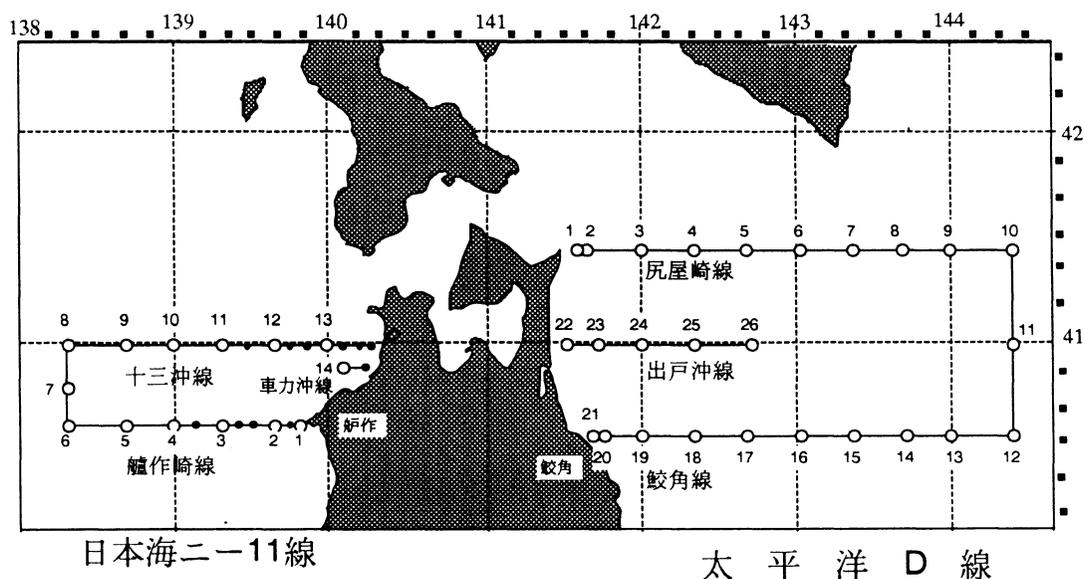


図1 太平洋および日本海の観測定線

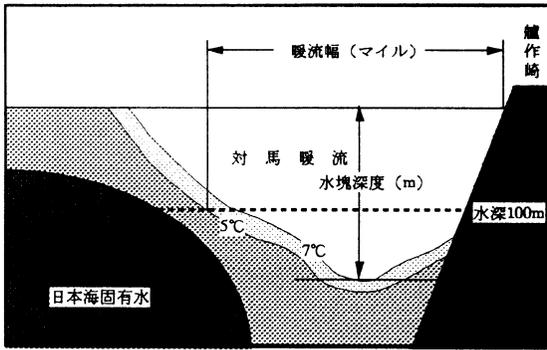


図2 蘆作崎鉛直断面模式図

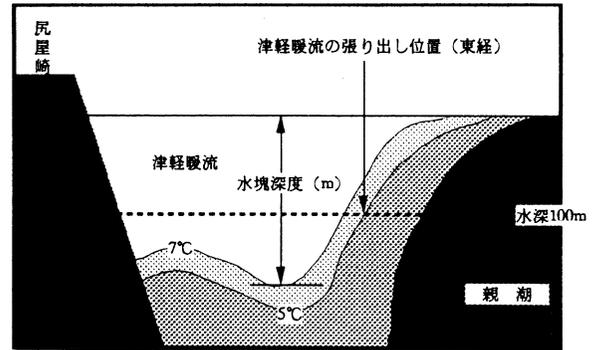


図3 尻屋崎鉛直断面模式図

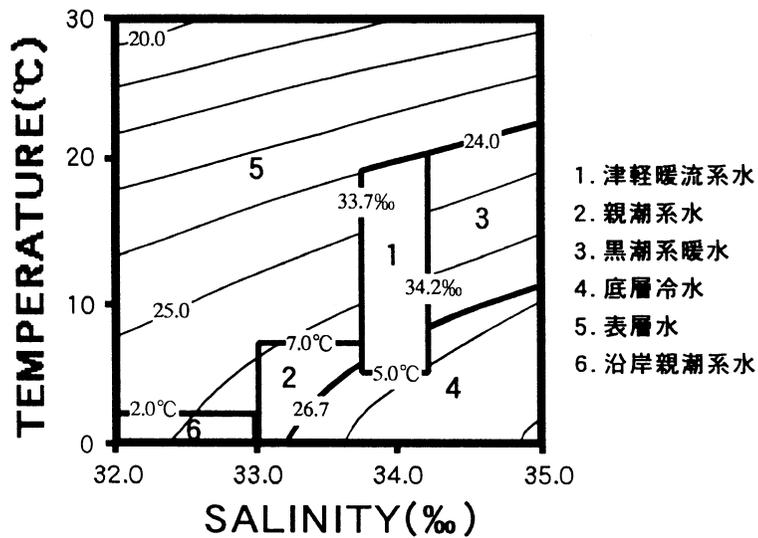


図4 花輪、三寺（1986年）等の水塊分類法

参考 平年比較の度合い（気象庁の海面水温偏差の階級区分を参考にした。）

表現	偏差比（標準偏差に対する割合）		
はなはだ高い	+200%以上		（およそ44年に1回の発生に相当）
かなり高い	+130%以上	+200%未満	（およそ14年に1回の発生に相当）
やや高い	+60%以上	+130%未満	（およそ6年に1回の発生に相当）
平年並	-60%以上	+60%未満	（およそ2年に1回の発生に相当）
やや低い	-130%以上	-60%未満	（およそ6年に1回の発生に相当）
かなり低い	-200%以上	-130%未満	（およそ14年に1回の発生に相当）
はなはだ低い		-200%未満	（およそ44年に1回の発生に相当）